海南省に見る「中国の今」

2012.03.25

香港　花木

（1）富裕層

No.32 でお伝えしたとおり、中国には投資可能資産 1 億円以上の富裕層が 121 万戸あり、またその数は毎年約 15%の勢いで増加しているとされる。

3 月末に海南省を訪問した際、当地にあるクルーザーヨット工場を訪問した。この工場はもともとニュージーランドで富裕層向けのクルーザーヨットを生産していたが、中国の富裕層市場の急成長に目を付け、2010 年に美しい海のあるここ海南省に工場を設立したという。面白いのは、中国に工場を設立したと同時に、もともとニュージーランドにあった工場も畳んでしまい、働いていたニュージーランド人は全員中国に移住してこの工場で働いているということであった。クルーザーヨットは高価なものだと 1 艘 800 万元（1 億円）程度するが、その生産コストの約半分は人件費で、目下のところは工員の技能レベルが低いため生産性が悪くあまり安くなっていないものの、今後工員が習熟して技能レベルが上がってこれば相当なコストダウンが可能ということであった。

中国の富裕層向け市場は、はたしてニュージーランド人に元々の工場を畳んでまるごと中国に移住させるほど魅力的なものなのだろうか？中国では、足もと、住宅価格の低下をはじめとして景気の低迷が言われるが、少なくともこのクルーザーヨット工場では注文へ

の影響はなく、むしろ高級なヨットほどよく売れているということで、現在数年分の注文を抱えているとの話であった。これは、富裕層の増加という面に加え、中国人が今後より余暇を重視し、余暇関連分野に積極的にお金を使いつつあるということではないかと思った次第である。なお、海南島では、こうしたクルーザーヨット保有台数の増加を見込んで、ヨット停泊場も急ピッチで増設されつつあるということであった。

ちなみに、このクルーザーヨット工場のある海南省臨高県は、全国で 594 ある「特別貧困県」の一つで、中央政府から特別補助金が交付されているという。このクルーザーヨット工場もこうした特別補助金を受けて誘致された企業ということで、確かに税収や雇用には貢献しているのかもしれないが（ただし雇用の多くは大陸各地から採用した大卒生とのことだった）、貧困県向けの補助金を使って富裕層向けの製品を作る工場を誘致したという話は、戦略としては確かに正しいのかもしれないが、やや割り切れないような、不思議な気持ちもしたことも付言しておきたい。

http://www.genesismarinecruisers.com/english/index.asp（同社 HP）

また、陸上に目を移すと、海南島（海口市）では、フェリーに乗ってやってきたと思われる北京や上海ナンバー、更には黒竜江省ナンバーの車を時々見かけた。中国では既に総延長 74000km とアメリカ（80,000km）にほぼ匹敵する高速道路網が建設されており、長い休暇を取り、自分で車を運転しての長距離を旅行する人たちが増えているようだ。ただし、キャンピングカーの売行きはまだまだで、保有台数は全国でわずか 6,000 台に過ぎず、米国（890 万台）はもとより我が国（78,000 台）の 10 分の 1 以下でしかないという。（3/23 China Daily）この理由にはオートキャンプ場の整備が進んでおらず、一般の駐車場に車を停めるしかないこと、その場合、夜中に警察が見回りに来ていろいろと面倒が多いこと等があるという。しかし、国土が広大で雄大な自然を持つ中国ではキャンピングカーの価値も本来は大きいはずで、今後インフラが整備されればマーケットが急速に拡大する可能性は高いだろう。

（２）環境

さて、今回は海南省の省都「海口市」の郊外にあるゴミ処理場を訪問した。中国では経済の発展に伴いゴミの量が急増しているが、今でも基本的には埋め立て処理が主流であり、地域住民の権利意識拡大に伴ってゴミ処分場の建設が難しくなりつつあるという。

こうした中で、海口市は昨年 2011 年から市内で発生する日量 1400 トンにのぼる生活ゴミを全て焼却処分することとし、市内西部に大規模なゴミ焼却場を建設した。この焼却場ではゴミを利用した発電（1 万 2 千 kW×2 基）も行っており、その基幹施設であるボイラには日本企業が技術を提供しているということであった。（他には排煙処理関係はヨーロッパの技術、発電は中国の技術とのこと。）また、発電所の総建設コストは土地代も含めて 4.66 億元、南方電網への売電価格は kWh 当たり 0.378 元で、実際の発電コストはこれを上回る

ものの、ゴミの受入れ料（トン当たり 40 元）を投入することで基本的には利益ほぼゼロながらなんとか商業運営を行っているというから大したものである。（運営元は国有企業の中電国際新エネルギーである。）

←外観や緑化にも気を使った処理場。臭いはほとんどない。

この規模のゴミ焼却発電施設を土地代も含めて 4.66 億元（60 億円）で建設するというのはかなりのコストダウンではないかと思うがどうだろうか。もちろん、環境に対する周辺住民の意識にはまだまだ違いがあるので、日本の場合追加コストが大きくならざるを得ないのかもしれないが、利益を生まないとしても商業ベースで運営できるのであれば、今後、こうした施設が中国に急速に拡大してくるのではないかと感じた次第である。

（3）新エネルギー

海南島は北緯 18 度とハワイとほぼ同じ緯度に属し、年間を通じて日照時間が長く気候が温暖である。一方、島内には小規模な天然ガス田があるものの、ほとんどのエネルギーは外部から船運により輸送してこなければならずコストが高い。（日本と同じである。）この

ため、例えば海口空港から市内を結ぶ幹線道路には小規模風車と太陽電池板を備えた街灯を設置している等、新エネルギーの利用に力を入れている。

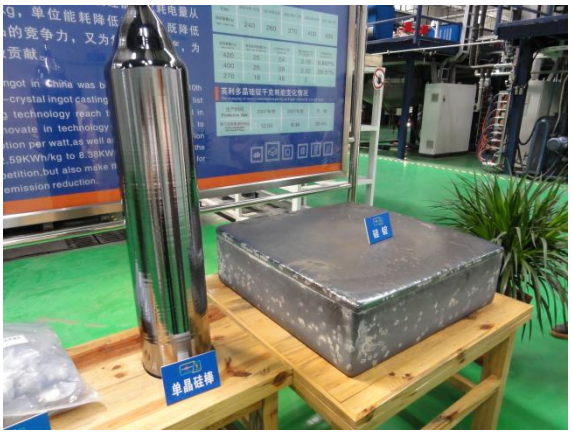
こうした中で、昨年 11 月から海口市東郊の臨高県内に「金太陽モデルプロジェクト」の一環として設置された出力 2 万 kW の太陽光発電所が稼働を始めたという。この「2 万 kW（20MW）」という発電規模は、日本でソフトバンクの孫社長が提唱した「メガソーラー構想」で出てきたのと同じ規模であり、太陽光発電所としてはかなりの規模であるといえよう。（なお、現在、中国で最大の太陽光発電所は青海省にある 62MW のものである。）
今回訪問した発電所は敷地面積が 420 ムー（28 ヘクタール）と広大で、建設総コストは 4.4 億元（約 60 億円）、うち「金太陽」政策に基づく補助金が 50%の 2.2 億元で、残りは（やや意外なことに）海南省の融資プラットフォームが出資したという。年間計画発電量は 2600 万 kWh で、発電コストは kWh 当たり 1 元（13 円）程度だが、南方電網による買取価格は kWh 当たり 0.49 元（6.4 円）なので、運営に当たってもかなりの持ち出しが必要なようだ。なお、中国では日本と異なり（日本でも今後はそうなることになっているが）基本的に発電された新エネルギーは送電会社が全量買取り義務があるが、その価格は比較的競争力のある水準に抑えられている。風力発電については、こうした水準でも利益が出るようになっているものの、太陽光はまだまだであり、現状では中国国内で生産した太陽光発電パネルはそのほとんどが欧州等への輸出向けとなっている。欧州経済の低迷に伴い、欧州における太陽光発電補助政策が大きく見なおされる中で、中国の太陽光発電パネル生産事業者はその過剰な生産能力を持てあましている状態にあり、今回の全人代でも太陽光発電の普及促進を進めるかどうか（イコール国家がより多く補助金を支出すべきかどうか）が大きな論点となったのは記憶に新しい。

↑　20MW 規模の太陽光発電所。非常に大きな土地が必要だ。

なお、ここで使われている太陽光パネルは中国第二位の太陽光パネルメーカーYingli（英利。ちなみに第 1 位は Suntech（尚德））が同じく海南省で生産したものである。英利はもともと解放軍に勤務していた苗連生氏が、解放軍を退職した後、1987 年に河北省保定で化粧品販売会社を開業したことに起源を持つが、1999 年からは経営多角化の一環として太陽光パネル発電事業に参入、海外製造装置メーカーの先端機器を積極的に導入してシリコンから太陽光パネルまでを一貫生産、2007 年にはニューヨーク証券市場に上場、現在は世界

中に合計 200 万 kW の太陽光パネルを販売し、2010 年のサッカー南アフリカワールドカップでは公式スポンサーを務めて世界中にその名を知られるようになっている企業である。（中国にはこうして異分野から参入して急成長した企業が多い。）同社の太陽光パネルは発電効率が 17%と比較的高い割にコストが安く、「庶民でも求められる太陽光パネル（老百姓用得起的光伏）」をキャッチフレーズにしている。なお、海南島には英利集団の子会社があり、6000 ムー（400ha）という巨大な敷地内に工場はじめオフィスやリゾート施設を含む大規模な拠点を計画中（工場は完成済み・稼働中）である。

↑　英利集団の海口市工場（稼働済み部分は赤線部のみ）



↑　海南英利工場内（左）と、同社の「太陽光自動車」（右）

（4）その他

海南省の基幹経済はやはり農業、特にバナナ栽培であろう。しかし、今回偶然知ったのだが、海南島では 1970 年代からコーヒー豆栽培も行っているということだった。生産量としては雲南省産が中国の約 99%と圧倒的だが、ハワイと似た気候の海南島で作られるコーヒー豆はハワイのコナコーヒーと同様品質が高く人気があるという。

栽培の中心は海口の西にある「福山村」で、その名も「福山コーヒー」という。海口やリゾート地三亜にも喫茶店を開業しており、村ぐるみでコーヒー豆栽培と関連観光事業に力を入れているということであった。こうした取組も農村の収入を高める上で大いに役立っていることは間違いないであろう。

↑　海南島オリジナルブランドの「福山コーヒー」と「コーヒー文化村」（右）

（以上）

Disclaimer: 本資料中の数字は注意してチェックしていますが正確さを保証するものではありません。

文章中意見にかかる部分は個人的見解でありいかなる組織の意見でもありません。